

平成30年7月6日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2018年度（第33回）大同生命地域研究賞  
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）  
では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。

受賞者および、賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成30年7月20日（金）14：00～

場所：一般社団法人 『クラブ関西』

大阪市北区堂島浜1-3-1 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

○自然環境研究センター理事長・東京大学名誉教授 大塚 柳太郎 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

○京都大学 東南アジア地域研究研究所教授 岡本 正明 氏

○国立民族学博物館教授・総合研究大学院大学教授 齋藤 晃 氏

○立命館大学 国際関係学部教授 末近 浩太 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

○日本カザフ研究会代表・市民環境研究所代表理事 石田 紀郎 氏

以上

照会先：公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局（市村）

電話：06（6447）6357 / FAX：06（6447）6384

# 大同生命地域研究賞について

## 1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

## 2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア（ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域）。

## 3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

### (1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

### (2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

### (3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

#### 4. 選考

(1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。2018年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

早稲田大学人間科学学術院 教授	井上 真 氏
国立民族学博物館 名誉教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部 教授・同大学図書館 館長	臼杵 陽 氏
国立民族学博物館 教授	小長谷 有紀 氏
名古屋外国語大学世界共生学部 教授	島田 周平 氏

(2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2018年度

大同生命地域研究賞 受賞者

◆大同生命地域研究賞（1名）

「人類生態学に基づくオセアニア地域研究と人口史・人類史研究」

○自然環境研究センター理事長 /

東京大学名誉教授

おおつか りゅうたろう  
大塚 柳太郎 氏

◆大同生命地域研究奨励賞（3名）

「インドネシアの民主化・自由化がもたらす政治変容の多面的側面の研究」

○京都大学東南アジア地域研究研究所教授

おかもと まさあき  
岡本 正明 氏

「ラテンアメリカ地域における異文化交渉の動態的研究」

○国立民族学博物館教授 /

総合研究大学院大学教授

さいとう あきら  
齋藤 晃 氏

「シリア・レバノンを中心とした現代中東における

イスラーム主義思想・運動研究」

○立命館大学国際関係学部教授

すえちか こうた  
末近 浩太 氏

◆大同生命地域研究特別賞（1名）

「環境問題を中心とするカザフスタン研究の先導」

○日本カザフ研究会代表 /

市民環境研究所代表理事

いしだ のりお  
石田 紀郎 氏

2018年度  
大同生命地域研究賞

大塚 柳太郎 氏

自然環境研究センター 理事長

東京大学 名誉教授

## 略 歴

大塚 柳太郎 (おおつか りゅうたろう)

1. 現 職：一般財団法人 自然環境研究センター 理事長  
東京大学 名誉教授
2. 最終学歴：東京大学大学院 理学系研究科 修士課程修了 (1970年)
3. 主要職歴：1970年 東京大学 医学部 助手  
1981年 東京大学 医学部 助教授  
1992年 東京大学大学院 医学系研究科 教授  
2005年 国立環境研究所 理事長  
2009年 自然環境研究センター 理事長  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ①『ヒトはこうして増えてきた 20万年の人口変遷史』新潮社、2015
  - ②『人類生態学第2版』東京大学出版会、2012
  - ③『人間の生態学』朝倉書店、2011
  - ④『興亡の世界史 20 人類はどこへ行くのか』講談社、2009
  - ⑤“Health Change in the Asia-Pacific Region,” Cambridge University Press, 2007
  - ⑥『地球に生きる人間』小峰書店、2004
  - ⑦『島の生活世界と開発 4 生活世界からみる新たな人間—環境系』東京大学出版会、2004
  - ⑧『島の生活世界と開発 1 ソロモン諸島—最後の熱帯林』東京大学出版会、2003
  - ⑨『講座生態人類学 5 ニューギニア—交錯する伝統と近代』京都大学学術出版会、2002
  - ⑩『地球人口 100億の世紀』ウェッジ、1999
  - ⑪“Environmentally Sound Agricultural Development in Rural Societies: A Comparative View from Papua New Guinea and South China,” UNESCO, 1998
  - ⑫『熱帯林の世界 2 トーテムのすむ森』東京大学出版会、1996
  - ⑬『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社、1995
  - ⑭『モンゴロイドの地球 2 南太平洋との出会い』東京大学出版会、1995
  - ⑮『講座地球に生きる 3 資源への文化適応』雄山閣、1994
  - ⑯『オセアニア 1 島嶼に生きる』東京大学出版会、1993
  - ⑰“Population Ecology of Human Survival: Bioecological Studies of the Gidra in Papua New Guinea,” University of Tokyo Press, 1990
  - ⑱“Human Ecology of Health and Survival in Asia and the South Pacific,” University of Tokyo Press, 1987

⑲ “Oriomo Papuans: Ecology of Sago-Eaters in Lowland Papua,” University of Tokyo Press, 1983

⑳ 『生態学講座 25 人類の生態』 共立出版、1978

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考 : 1980 年 理学博士 (東京大学)

## 業績紹介

「人類生態学に基づくオセアニア地域研究と人口史・人類史研究」に対して

大塚柳太郎氏は、1971年以来、45年以上にわたってパプアニューギニアを主たる対象として人類生態学に基づくオセアニア研究を推進されてきた。

同氏の最大の学問的功績は、人類生態学を主軸とする独自の地域研究モデルを理論構築したことにある。長期にわたって研究対象としたニューギニア島中央南部に居住するギデラ人(言語族であり、生物学的な意味での個体群でもある)と生活を共にする中で、ギデラ人が環境と相互作用しながら生存するシステムについて、個体レベルと個体群レベルを綿密に峻別するなど、独自性の高い分析法を用いて明らかにしてきた。

具体的には、村落を対象とした調査において、個人レベルでの生業活動や栄養状態、健康状態などを把握し、それを性別や年齢、年齢階梯などの社会的地位と関連づけて分析を行った。特に焦点をあてたのは、個人や世帯間での適応力の不均衡やそれに対する社会的な保障機構で、伝統的な生活様式が維持されている場合にはそれがより良く機能していることなどを明らかにした。

一方、ギデラ人の長期的な生存・適応を理解するため、ギデラ人全員を対象とした数世代に遡る詳細な家系資料の復元も行った。その膨大な資料を用いて人口増加率を推定した結果、近代化の影響がほとんどなかった頃の年人口増加率は約0.2%であったこと、増加した人口を維持するため、マラリアの高感染域である川沿いへも生息地を拡張したこと、それによって人口が増加した村落と減少した村落が同時に存在したこと、などを初めて実証的に明らかにした。さらに近年は、予防接種の開始や食生活の変化などによって死亡率が急速に改善して人口が急増している一方、成人病の罹患率も急上昇するなどの諸現象が起きていることなども明らかにしている。

これらの研究成果は、和書11冊、洋書3冊や多数の論文に結実し、国際的にも高く評価されている。さらに特筆すべきは、オセアニア研究の日本における拠点となる日本オセアニア学会を草創期から大きく育てることに貢献し、大学では多くのオセアニア研究の若手研究者を育成したことである。博士号取得者に限っても、その数は22名にのぼり、大半は各地の大学などで地域研究の拠点となる研究を継続している。

他方で、大塚氏は調査対象をオセアニア・アジアの諸地域集団へと広げ、ヒトの生存と地域生態系との相互作用の様態をより普遍的に考察し、既存の地域研究では捉え難い諸課題を抽出し、その根源的な治癒につながる道筋を照らす斬新な地域研究を創出する

ことにも貢献した。

1999年からは、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業『アジア地域の環境保全』（1999～2002年）のプロジェクト「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」の代表者として、ソロモン諸島、中国・海南島、沖縄列島を対象に、地域研究のノウハウを最大限に活用した研究を8分野にわたる理系、文系の研究者を巻き込んで展開した。具体的には、人類生態学、文化人類学、人文地理学、農学、人類遺伝学、医学・ウイルス学、地球化学などさまざまな方法論に基づく地域研究の成果を結びつけることによって、ヒトの適応形態をより詳細かつ総合的に考察できることを展望し、実践したのである。

同氏の地域研究モデルは、先端諸学の発展によって学問環境が著しく専門が細分化している状況のなかで、既成の学問の枠にとらわれず、関連する諸分野の研究成果を機能的に連結し、より包括的な研究を実践しようという、いわゆるシステムサイエンス的な発想に基づいている。この研究モデルは、その後の地域研究に新たな道筋をつけるという大きなインパクトを与えた。

大塚氏の地域研究モデルの根底には、人口・食糧・環境・疾病問題など現代社会が抱える課題の解決に有用な科学的知見を調査探求するという視点がある。今日的で地球的な諸課題の深刻さは、その根本的治癒につながる道筋が容易に見えてこないところにある。人類生態学は現実の問題を技術的な方策でもって是正することはできないが、過去に起こった、あるいは進行中の同種の事例を分析し、それを主軸とする地域研究を進めることによって、我々に対して警鐘や将来に対する展望を与えることができることを立証したのである。

時代の要請に応えられる地域研究はどうあるべきか、いかに実践するか、という地域研究のもつ根源的な課題に果敢に取り組み、その学問的・教育的・社会的価値を多方面に展開させた大塚氏の貢献は多大なものがある。その成果の一端は、地球規模の人間—環境系の変遷史をわかりやすく解説した『ヒトはこうして増えてきた：20万年の人口変遷史』（2015年 新潮社）に結実している。地域研究が目指すひとつのモデルとして高く評価できる。

以上の理由から、選考委員会は大同生命地域研究賞の授与を決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2018年度  
大同生命地域研究奨励賞

岡本 正明 氏

京都大学 東南アジア地域研究研究所 教授

## 略 歴

岡本 正明 (おかもと まさあき)

1. 現 職：京都大学 東南アジア地域研究研究所 教授
2. 最終学歴：京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程研究指導認定退学  
(1999年)
3. 主要職歴：1999年 京都大学 東南アジア研究センター 非常勤研究員  
2001年 国際協力事業団 (JICA) 専門家  
(スラウェシ地域開発政策支援)  
2003年 京都大学 東南アジア研究センター 助教授  
2013年 ハーバード大学 イェンチン研究所 シニア研究員  
2014年 コーネル大学 東南アジアプログラム 客員研究員  
2017年 京都大学 東南アジア地域研究研究所 教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① 岡本正明 2018年2月, 「もう一つの油戦争—不健康なパーム油という言説, その対抗言説の誕生と発展—」『東南アジア研究』第55巻第2号, 217-239頁【単著】
  - ② Okamoto Masaaki 2017年8月, Politik Waria dan Tanda Demokratisasi Tahap Kedua di Indonesia: Relawan Waria untuk Jokowi-JK pada Pilpres 2014. Ahmad Suaedy ed. Perubahan Karakter Gerakan Sosial di Indonesia dalam Partisipasi Politik Pilpres 2014. Abdurrahman Wahid Center-University of Indonesia. pp.217-241【単著】
  - ③ 岡本正明 2017年7月, 「インドネシアにおける暴力をめぐる公私のポリティクス」村上勇介・帯谷知可編『多元多層の共存空間—「環太平洋パラダイム」の可能性』京都大学学術出版会, 195-220頁【単著】
  - ④ 岡本正明 2017年3月, 「インドネシアにおける政治の司法化、そのための脱司法化：汚職撲滅委員会を事例に」、玉田芳史編著『政治の司法化』, 93-120頁【単著】
  - ⑤ 岡本正明 2016年3月, 「民主化したインドネシアにおけるトランスジェンダーの組織化と政治化、そのポジティブなパラドックス」『イスラーム世界研究』第9巻, 231-251頁【単著】
  - ⑥ 岡本正明、2015年6月、『暴力と適応の政治学—インドネシア民主化と安定の地方構造』京都大学学術出版会. 【単著】
  - ⑦ 岡本正明 2015年3月, 「ユドヨノ政権の10年間：政治的安定・停滞と市民社会の胎動」川村晃一・東方孝之編著『新興民主主義大国インドネシア—ユドヨノ政権の10年と2014年選挙—』(ジェトロ・アジア経済研究所), 159-184頁【単著】

- ⑧ Okamoto Masaaki 2014年4月, Jakartans, Institutionally Floatable, Journal of Current Southeast Asian Studies Vo.33, No.1, pp.7-28【単著】
- ⑨ 岡本正明 2012年2月, 「逆コースを歩むインドネシアの地方自治: 中央政府による「ガバメント」強化への試み」 船津鶴代・永井史男編『東南アジア: 変わりゆく地方自治と政治』(ジェトロ・アジア経済研究所), 27-66頁【単著】
- ⑩ Ota Atsushi, Okamoto Masaaki and Ahmad Suaedy eds. 2010年12月, Islam in Contention: The Rethinking of Islam and State in Indonesia. Jakarta: CSEAS, CAPAS and Wahid Institute. x+468p.【編著】
- ⑪ Okamoto Masaaki 2009年9月, Populism under Decentralization in post-Suharto Indonesia. In Mizuno Kosuke and Pasuk Pongpaichit (eds.), Populism in Asia, NUS, pp.144-164【単著】
- ⑫ Okamoto Masaaki 2008年10月, Jawara in Power, 1998-2007, Indonesia 86, pp.109-138【単著】
- ⑬ 岡本正明 2006年8月, 「分権化に伴う暴力集団の政治的台頭ーバンテン州におけるその歴史的背景と社会的特徴」, 杉島敬志・中村潔編『現代インドネシアの地方社会: ミクロロジーのアプローチ』NTT出版, 43-66頁【単著】
- ⑭ Okamoto Masaaki and Abdur Rozaki eds. 2006年8月, Kelompok Kekerasan dan Bos Lokal di Indonesia Era Reformasi, Yogyakarta: IRE Press. xxii p.+161p.【編著】
- ⑮ 岡本正明 2005年6月, 「インドネシアにおける地方政治の活性化と州「総督」の誕生ーバンテン地方の政治: 1998-2003」『東南アジア研究』第34巻第1号, 3-25頁【単著】

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考: 2013年 地域研究論文博士 (京都大学)

## 業績紹介

「インドネシアの民主化・自由化がもたらす政治変容の多面的側面の研究」に対して

岡本正明氏は、政治学者として、地域研究者として、東南アジア、とりわけインドネシアの政治社会に深く広く分け入り、その民主化や自由化の影響と意義をめぐる理論と実証について、質の高い研究を発信し続けている研究者である。

同氏の研究は、ミクロな地方の政治社会変容を、国政レベル、さらには東南アジアレベルでの政治社会変容の文脈に位置づけて論じるという姿勢で一貫している。具体的には、地方政治、LGBTに関する研究、アブラヤシの政治経済、に大別される。

地方政治研究では、従来国政や国軍の研究に集中しがちだったインドネシアの政治分析ではみえてこなかった地方の論理を、民主化・地方分権化時代の同国における暴力集団への体をはったフィールド調査に基づいて明らかにした。その成果をとりまとめた『暴力と適応の政治学』（京都大学学術出版会、2015）は、民主化後のインドネシア地方政治の安定化のロジックを克明に描き出したものであり、政治学の議論と地域研究の醍醐味を架橋した力作である。その後、東南アジア首都圏の政治研究も進め、ジャカルタの政治研究の特集号をドイツの英文学術誌（Special Issue: Local Politics in Jakarta, *Journal of Current Southeast Asian Studies*, Vol. 33, No. 1, 2014）（本名純と共編著）に掲載し、首都の持つ政治的特殊性と一般性を多角的に検証し、注目を浴びた。また、地方エリートサーベイなどを行い、量的な地方政治分析にも着手し始めている。政治と暴力の分野では、東南アジアにおけるフォーマルな暴力装置とインフォーマルな暴力装置の連続性に着目しながら、経済自由化のもとでの暴力の民営化についての研究を進めており、インドネシアの各種事例を取り上げたインドネシア語編著本（*Kelompok Kekerasan dan Bos Lokal di Indonesia Era Reformasi*, IRE Press, 2006）（アブドゥル・ロザキと共編）は現地の有名誌でも取り上げられた。さらに、インドネシアだけでなく、ミャンマーやマレーシアなども視野に入れ、東南アジア各国の暴力の民営化比較を行っている。

近年は、政治と暴力研究において、暴力を行使・利用するアクターではなく、その攻撃の対象であり被害者ともなってきたトランスジェンダーに着目した政治研究も始めている。インドネシアでは民主化・分権化とともに、多様なアクターが政治参加を求め始めた。トランスジェンダーを含めたLGBTも例外ではなかった。トランスジェンダーはこれまで差別され、警察やイスラーム組織の暴力に晒されてきたが、組織化していく中でエンパワーメントされていった。2014年の大統領選挙の際は、全国的に張り巡らされ

たネットワークを駆使して多元主義を標榜する候補者の支持に回るまでになった。岡本氏は、イスラーム圏で初めてとも言える、この画期的なLGBTの政治運動に着目して日本語（「民主化したインドネシアにおけるトランスジェンダーの組織化と政治化、そのポジティブなパラドックス」『イスラーム世界研究』第9巻、2016）並びにインドネシア語（Politik Waria dan Tanda Demokratisasi Tahap Kedua di Indonesia:Relawan Waria untuk Jokowi-JK pada Pilpres 2014, Ahmad Suaedy ed. Perubahan Karakter Gerakan Sosial di Indonesia dalam Partisipasi Politik Pilpres 2014, Abdurrahman Wahid Center-University of Indonesia, 2017）で論稿を出版した。

また、東南アジア、とりわけマレーシアとインドネシアで拡大するアブラヤシ生産と土地収奪に関する政治経済学的研究を共同で進め、学术界を超えた多様なアクターを巻き込み、世界的にも傑出した実証研究を含む最先端の成果論集（特集「アブラヤシ農園拡大の政治経済学—アクター・言説・制度の視点から」、『東南アジア研究』第55巻2号、2018）（林田秀樹と共編著）を刊行した。アブラヤシ栽培の急速な拡大を可能にする制度、言説、アクターを複合的に分析する試みである。さらに、フューチャー・アース・プログラムなどを通じて、アブラヤシ栽培を行う小農コミュニティのエンパワーメントにも関与している。インドネシア・リアウ州において、現地NGOと連携して、衛星画像やドローンを使って参加型地図づくりを行い、その地図をもとに村落の発展を考えていく試みである。多くの村では未だに村境が確定していない状況下で、小農自らが村内の土地所有を空間的に把握し、村境を確定すること自体が極めて政治的営為であるということ明らかにしようとしている。

これらの多岐にわたる研究成果を積極的に海外で発信しているだけでなく、ハーバード大学イェンチン研究所やコーネル大学東南アジアプログラム、シンガポールの東南アジア研究所で客員教員を務めるなどしており、海外の研究機関とのネットワークづくりを主導している。また、シンガポールの東南アジア研究所の学術誌Sojournやガジャマダ大学の東南アジア社会研究所の学術誌The Indonesian Journal of Southeast Asian Studiesの編集委員も務めている。

以上のように、世界レベルで東南アジア地域研究を牽引していく研究者としての岡本氏の業績を高く評価し、また今後のさらなる研究展開に期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2018年度  
大同生命地域研究奨励賞

齋藤 晃 氏

国立民族学博物館 教授

総合研究大学院大学 教授

## 略 歴

齋藤 晃 (さいとう あきら)

1. 現 職：国立民族学博物館 教授  
総合研究大学院大学 教授
2. 最終学歴：東京大学大学院 総合文化研究科 文化人類学専攻 博士課程 (1994年)
3. 主要職歴：1996年 国立民族学博物館 第4研究部 助手  
2003年 国立民族学博物館 博物館民族学研究部 助教授  
2014年 国立民族学博物館 先端人類科学研究部 教授  
2017年 国立民族学博物館 人類文明誌研究部 教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① Akira Saito y Claudia Rosas Lauro (eds.) Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, 2017.
  - ② Guerra y evangelización en las misiones jesuíticas de Moxos, Boletín Americanista 70: 35-56, 2015.
  - ③ Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas (en coautoría con Claudia Rosas Lauro, Jeremy Ravi Mumford, Steven A. Wernke, Marina Zuloaga Rada y Karen Spalding), Bulletin of the National Museum of Ethnology 39(1): 123-167, 2014.
  - ④ Akira Saito et Yusuke Nakamura (dir.) Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes», Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme, 2010.
  - ⑤ 齋藤晃編『テキストと人文学—知の土台を解剖する』京都：人文書院，2009.
  - ⑥ Creation of Indian Republics in Spanish South America, Bulletin of the National Museum of Ethnology 31(4):443-477, 2007.
  - ⑦ Arte y conversión cristiana en las misiones jesuíticas de Mojos y Chiquitos, Anuario de Estudios Bolivianos, Archivísticos y Bibliográficos 12: 581-609, 2007
  - ⑧ 岡田裕成・齋藤晃著『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会，2007.
  - ⑨ Clara López Beltrán y Akira Saito (eds.) Usos del documento y cambios sociales en la historia de Bolivia (SES 68), Osaka: National Museum of Ethnology, 2005.
  - ⑩ The Cult of the Dead and the Subversion of State Justice in Moxos, Lowland Bolivia, Journal of Latin American Lore 22(2):167-196, 2004.

- ⑪ 「戦争と宣教—南米イエズス会ミッションの捕食的拡張」『国立民族学博物館研究報告』28(2):223-256, 2003.
- ⑫ 「ビルトウチの処刑—ボリビア・アマゾンの一殺人事件とその記憶」『国立民族学博物館研究報告』24(4):727-766, 2000.
- ⑬ 『魂の征服—アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社, 1993.

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考：1991年 学術修士（東京大学大学院 総合文化研究科）

## 業績紹介

「ラテンアメリカ地域における異文化交渉の動態的研究」に対して

齋藤晃氏は長年にわたって、ラテンアメリカ地域を対象に、フィールド調査と文書館調査にもとづく地域研究を実証的に進めている歴史人類学者である。

同氏の主要な関心は、ヨーロッパによるアメリカの「発見」と「征服」がもたらした諸変化の解明にある。とりわけ、スペインの植民地支配が南米の先住民に及ぼした影響を、①文字と文書の導入、②キリスト教美術の移植、③集住化（ヨーロッパ様式の町への先住民の強制移住）の三点に焦点を絞って研究を進めており、その成果は国内外で高く評価されている。

まず第1の点に関しては、スペイン人が南米に導入したヨーロッパ起源の文字と文書が植民地支配の確立に貢献したこと、先住民がその利用に習熟することで彼らの権利擁護にも使われたことを、南米熱帯低地のミッション（キリスト教布教区）の事例に基づいて詳細に解明した。齋藤氏はその際、文字と文書を解読し、解釈するだけでなく、それらをモノとして作成して利用し、保管することが、スペイン人にとっても先住民にとっても重要だった事実注目し、知的活動の道具としてのテキストの形態と機能を歴史的に解明する共同研究を立ち上げた。この研究は、国立民族学博物館を拠点とする国内研究、およびフランスの人間科学館を拠点とする国際研究として展開された。とりわけ、パリで開催した国際シンポジウムの成果は、フランス語の編著として人間科学館から刊行され、好評を博した。

次に、第2の点については、齋藤氏は岡田裕成(ひろしげ)氏（大阪大学）とともにペルー、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチンの都市部と農村部を複数年かけて踏破し、植民地時代に建設されたキリスト教聖堂を体系的に調査した。この調査結果に基づき、旧スペイン領南米の聖堂装飾の全体像を把握するとともに、画像情報と文献情報を網羅的に収録した研究データベースを構築した。それに基づき、植民地美術をヨーロッパ人と先住民の異文化交渉の産物として捉え直し、ふたつの文化伝統が実体として融合したという従来の「メスティーツ（混血）」美術論にみられる単純な見解を退け、審美的な観点からでは計りきれないその複雑な歴史性を解明した。このような齋藤氏の研究は、歴史人類学の専門性を生かし、南米キリスト教美術の特質を、その背景となった社会・文化的脈絡の検討を通じて浮き彫りにした。

最後に第3の点である、スペイン人が南米の植民地で実施した先住民の集住化の研究は、齋藤氏が近年、もっとも精力を注ぐ分野である。歴史的評価の定まっていなかったこの政策について、齋藤氏はスペイン領南米全土に視野を広げて比較研究を進めている。日本はもとより、スペイン、米国、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリの専門家を集めて国際共同研究を立ち上げ、国際会議を主催し、スペイン語や英語で成果を発信している。そこでは、ヨーロッパの共同体モデルの一方的強制により先住民の社会と文化がなすすべなく破壊されたという従来の見方が再考されている。齋藤氏の研究によれば、集住化は中央政府の役人や現地の聖職者、有力なスペイン人植民者や先住民首長の交渉を通じて実施され、建設された先住民の町は外来の要素と在来の要素が入り交じり、新たな文化が生成する母体として機能したのである。

以上のいずれの分野においても、齋藤氏は、ヨーロッパの文化的ヘゲモニーのもとアメリカ在来の文化が破壊され、消滅したという通説を疑問視し、両文化の交渉を新たな価値や実践を生み出す創造的プロセスとして再定義している。そこには、旧大陸と新大陸、宗主国と植民地、歴史学と人類学、表象と実践、過去と現在などの一連の二項対立を媒介し、克服しようとする齋藤氏の研究上の独自性が認められる。この研究姿勢は、植民地主義研究における現代的潮流ではあるが、実証的な成果はいまだ限られているため、その成果が持つ価値は極めて高い。とくにこの研究の実現にあたり、さまざまな国の研究機関・研究者と共同研究を組織し、国内外で頻繁に研究集会を開催し、その成果を多言語で発信している点は、人文社会科学の国際化の模範であり、齋藤氏をこの分野を牽引する世界的権威として押し上げた要因ともいえる。

今日のラテンアメリカの社会と文化が、資源と権力をめぐる闘争、異なる世界観・人間観の拮抗、アイデンティティの再編などを通じて形成されてきたことは間違いなく、その点を考慮するならば、齋藤氏の研究は、ラテンアメリカ社会の歴史的基盤を解明する重要な営みであり、その研究を比類なきレベルにまで高めたことは、日本における地域研究にとっても実に幸いなことである。

以上の理由から、選考委員会は大同生命地域研究奨励賞の授与を決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2018年度  
大同生命地域研究奨励賞

末近 浩太 氏

立命館大学 国際関係学部 教授

## 略 歴

末近 浩太 (すえちか こうた)

1. 現 職：立命館大学 国際関係学部 教授
2. 最終学歴：京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科  
五年一貫制博士課程修了 (2004年)
3. 主要職歴：2004年 日本学術振興会 (PD)  
2006年 立命館大学 国際関係学部 助教授  
2007年 立命館大学 国際関係学部 准教授  
2014年 立命館大学 国際関係学部 教授  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① 「「IS後」のシリア紛争：輻輳する3つの「テロとの戦い」(焦点：中東の新たな課題)」『国際問題』第671号，2018年5月，pp. 37-48.
  - ② “Strategies, Dynamics and Outcomes of Hezbollah’s Military Intervention in the Syrian Conflict,” Asian Journal of Middle Eastern and Islamic Studies, Vol. 12, No. 1 (March), 2018, pp. 89-98.
  - ③ 『イスラーム主義：もう一つの近代を構想する』岩波新書，2018年，256 pp.
  - ④ 「シリア紛争の(批判的)地政学：「未完の物語」としての「シリア分割」(特集 いまなぜ地政学か：新しい世界地図の描き方)」『現代思想』第45巻18号，2017年9月号，pp. 109-119.
  - ⑤ 「現象としての「イスラーム国 (IS)」：反国家・脱国家・超国家」村上勇介・帯谷知可編『秩序の砂塵化を超えて：環太平洋パラダイムの可能性』京都大学学術出版会，2017年，pp. 173-193.
  - ⑥ 「イスラームとデモクラシーをめぐる議論」私市正年・浜中新吾・横田貴之編『中東・イスラーム研究概説：政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマ』明石書店，2017年，pp. 19-28.
  - ⑦ 「イスラーム主義運動の歴史的展開：中東地域研究におけるその意義を捉え直す」松尾昌樹・岡野内正・吉川卓郎編『中東の新たな秩序 (グローバル・サウスは今 第3巻)』ミネルヴァ書房，2016年，pp. 41-58.
  - ⑧ 「分断社会における国軍の相貌：レバノンにおける国民統合と国家建設のトレード・オフ」酒井啓子編著『途上国における軍・政治権力・市民社会：21世紀の「新しい」政軍関係』晃洋書房，2016年，pp. 168-193.
  - ⑨ 「現代の紛争」板木雅彦・本名純・山下範久編『プレリユード国際関係学』東信堂，2016年，pp. 103-146.
  - ⑩ 『比較政治学の考え方 (ストゥディア)』有斐閣，2016年，290 pp (久保慶一・高橋百合子との共著)
  - ⑪ 「中東の地域秩序の変動：「アラブの春」、シリア「内戦」、そして「イスラーム国」へ」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序 (関連地域研究 第2巻)』青弓社，2016年，pp.

49-73.

- ⑫ 「クサイルからの道：ヒズブッラーによるシリア「内戦」への軍事介入の拡大」『中東研究』第522号（2月），Vol. 3, 2015/16, 2016年，pp. 52-64.
- ⑬ 「暴力と憎しみのなかで何を語るべきか：シリアからフランス、日本へ」『現代思想（総特集 シャルリ・エブド襲撃／イスラム国人質事件の衝撃）』第43巻5号，2015年3月増刊号，pp. 204-210.
- ⑭ 「レバノン：「決めない政治」が支える脆い自由と平和」青山弘之編『「アラブの心臓」に何が起きているのか：現代中東の実像』岩波書店，2014年，pp. 85-115.
- ⑮ 「序論 中東の政治変動：開かれた「地域」から見る国際政治」『国際政治（特集 中東の政治変動）』第178号，2014年11月，pp. 1-14.
- ⑯ 「シリア問題は世界に何を突きつけたのか（特集 現代思想の論点 21）」『現代思想』第41巻17号，2013年12月号，pp. 183-189.
- ⑰ 「クサイルへの道：シリア「内戦」とヒズブッラー（焦点 中東の政治変動とイスラーム主義）『中東研究』第518号（9月），Vol. 2, 2013/14, 2013年，pp. 54-65.
- ⑱ 『イスラーム主義と中東政治：レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』名古屋大学出版会，2013年，480 pp（第4回地域研究コンソーシアム賞研究作品賞受賞）.
- ⑲ 「レバノンにおける多極共存型民主主義：2005年「杉の木革命」による民主化とその停滞」酒井啓子編『中東政治学』有斐閣，2012年，pp. 81-94.
- ⑳ 「「恐怖の均衡」がもたらす安定と不安定：国際政治とレバノン・イスラエル紛争」吉川元・中村覚編『中東の予防外交』信山社，2012年，pp. 215-239.
- ㉑ 「2010年の歴史学会 回顧と展望：西アジア・北アフリカ（近現代）」『史学雑誌』第120巻第5号，2011年6月，pp. 293-297.
- ㉒ 『現代シリア・レバノンの政治構造（アジア経済研究所叢書5）』岩波書店，2009年，278 pp（青山弘之との共著）.
- ㉓ 「グローバリゼーションと国際政治（2）：「イスラーム」の「外部性」をめぐる」大久保史朗編『グローバリゼーションと人間の安全保障（講座 人間の安全保障と国際犯罪組織 第1巻）』日本評論社，2007年，pp. 73-94.
- ㉔ 「「レバノン」をめぐる闘争：ナショナリズム，民主化，国際関係」『中東研究』第494号，Vol. 3, 2006/07, 2006年，pp. 56-67.
- ㉕ 「レバノン包囲とヒズブッラー（連載講座 中東の政治変動を読む6）」『国際問題』第555号，2006年10月，pp. 50-58.
- ㉖ 『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版，2005年，368 pp.
- ㉗ 「シリアの外交政策と対米関係：対レバノン、対イスラエル政策とイスラーム運動の動向を中心に」日本国際政治学会編『国際政治（特集 国際政治のなかの中東）』第141号，2005年5月，pp. 40-55.
- ㉘ 現代レバノンの宗派制度体制とイスラーム政党：ヒズブッラーの闘争と国会選挙」日本比較政治学会編『現代の宗教と政党：比較のなかのイスラーム』早稲田大学出版会，2002年，pp. 181-212.
- ㉙ 「ラシード・リダーと戦間期のシリア統一・独立運動」『日本中東学会年報』第17-1号，2002年，pp. 123-153.
- ㉚ “Rethinking Hizballah: Transformation of an Islamic Organisation,” 『日本中東学会年報』第15号，2000年，pp. 259-314.

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

## 業績紹介

「シリア・レバノンを中心とした現代中東における  
イスラーム主義思想・運動研究」に対して

末近浩太氏は、中東地域研究、特にシリア・レバノンにおけるイスラーム主義の思想と運動に関する研究において顕著な業績をあげてきた、将来性のあるすぐれた若手研究者の一人である。

同氏は、レバノンとシリアを中心とした現代中東におけるイスラーム主義の思想と運動の史的展開について、アラビア語一次史料の解析と現地調査を駆使しながら研究してきた。

その研究成果は、まず、博士論文を単著として出版した『現代シリアの国家変容とイスラーム』（ナカニシヤ出版、2005年）にまとめられた。そして、その後の成果については、『イスラーム主義と中東政治—レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』（名古屋大学出版会、2013年）という大部の単著として刊行されている。さらに、最近では、一般向けの読者を対象に『イスラーム主義—もう一つの近代を構想する』（岩波新書、2018年）を上梓し、研究成果の社会への還元にも大きな貢献をしている。

末近氏は、単独論文を多数執筆しているが、主要なものは上記の諸作品に所収されているため、ここではこれらの著書を中心に研究業績を紹介する。

同氏の研究の特徴は、以下の三点に認めることができる。

まず何よりも、研究テーマとして、現代の中東、特にアラブ世界におけるイスラーム主義の思想と運動の実態解明に一貫して尽力してきた点である。末近氏の関心のありようは、博士論文を著書としてまとめた『現代シリアの国家変容とイスラーム』の構成に示されている。すなわち、シリア出身のラシード・リダー、ムスタファー・スィバーイー、そしてサイド・ハウワーといった、現代におけるイスラーム主義の思想家や運動の指導者を中心に上げつつ、イスラームと近代国家の関係をめぐる歴史と理論の実態の解明に取り組んできた。こうした取り組みは、2011年からのシリア紛争の泥沼化やシリアとイラクの「イスラーム国（IS）」の台頭の背景を考える上でも、極めて有益な視座を提供するものであるといえる。

第二の特徴として挙げられるのは、中東地域研究と国際政治学・比較政治学を、学際的な方法論に基づいて結びつけるというユニークな研究手法を開拓した点である。これらの学問分野を結びつけるためのテーマ・トピックとして取りあげられてきたのが、他ならぬイスラーム主義である。こうした研究手法は、『イスラーム主義と中東政治—レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』において大きな発展を見せている。すなわち、ヒ

ズブッラーを、「中東政治の結節点」として、レバノン政治、中東政治、国際政治の様々なアクターの思惑が交差する点として、あるいはまた次々に新たな局面が生起する点としての観点から分析することで、中東地域研究における学問分野の壁を越える新たな枠組みの提示が試みられている。本書は、第4回地域研究コンソーシアム研究作品賞（2014年）を受賞するなど、地域研究の学際的なアプローチを実践した優れた研究成果として、高く評価されている。

第三の特徴は、上記の二つの取り組みを通して、イスラーム主義の思想と運動を理解するための新たな視角を提示したことである。これは、最新の著作である岩波新書の『イスラーム主義—もう一つの近代を構想する』におけるサブタイトルに象徴されている。すなわち、末近氏によれば、現代の中東は「長い帝国崩壊の過程」にあり、イスラーム主義は、「（オスマン）帝国後」の「あるべき秩序」として「もう一つの近代」を追求してきたとされる。このようにイスラーム主義を捉えることは、それを奉じる人びとを十把一絡げにテロリストと同一視するような、過度に単純化された通俗的な見方を乗り越え、その実態を的確に理解していく上で重要な意味があると思われる。これは、地域研究としての大きな貢献であるといえる。

以上、三点にわたり末近氏のイスラーム主義に関する研究業績に関して、特に学際的な研究への取り組みにおける実績をあげたが、その他、学会や研究プロジェクトの組織・運営といった学術活動の面でも、地域研究の発展への貢献を見せている。日本中東学会や日本比較政治学会の理事、それから、科学研究費補助金をはじめとする複数の研究プロジェクトの研究代表者をつとめてきた。

以上のような末近浩太氏の研究実績や学術活動の実行力などを高く評価し、さらに現代中東を対象とした地域研究の新たな展開を期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2018年度  
大同生命地域研究特別賞

石田 紀郎 氏

日本カザフ研究会 代表

市民環境研究所 代表理事

## 略 歴

石田 紀郎 (いしだ のりお)

1. 現 職：日本カザフ研究会 代表理事  
NPO 法人 市民環境研究所 代表
2. 最終学歴：京都大学農学科 博士課程単位取得満期退学（1968年）
3. 主要職歴：1968年 京都大学 農学部 文部教官 助手  
1990年 京都大学 農学部 文部教官 助教授  
1998年 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 文部教官 教授  
2006年 京都学園大学 バイオ環境学部 教授  
2010年 京都学園大学 バイオ環境学部 退職  
2010年 人間環境大学 特任教授  
2012年 人間環境大学 特任教授 退職  
現在に至る
4. 主な著書・論文：
  - ① 現場につながる学者人生 2018 藤原書店
  - ② 消えゆくアラル海を追いかけて（26回 2008～2009 連載 環境浄化技術 7（9）～8（12）  
『中央ユーラシアを知る事典』、平凡社、【共著】
  - ③ 衛星リモートセンシングを用いた乾燥地域における広域生態系の評価  
堀川真弘、夏原由博、前中久行、森本幸裕、石田紀郎  
景観生態学会、10（1）：11-23、小特集 2005
  - ④ 小アラル海の再生に向けて：底生微少藻類と植物プランクトンの一次生産  
辻村茂男、中原紘之、石田紀郎 日本カザフ研究会報告書 11：1-10、2003
  - ⑤ アジアの水環境と農業：アラル海問題を中心に  
石田紀郎 アジア環境白書 2003/2004、215-225、東洋経済社 2003
  - ⑥ 『中央アジアを知るための60章』、明石書店、【共著】2003.5  
アラル海一陸地化する湖 世界の湖 87-95 滋賀県琵琶湖研究所編、人文書院 2001
  - ⑦ アラル海環境問題と中央アジアの安定 野村政修、石田紀郎 ロシア研究 33：100-117  
2001
  - ⑧ 乾燥地における大規模灌漑と河川・湖沼の水質・生態系—中央アジアの河川・湖沼の水質・  
生物相の特徴と変化— 中原紘之、石田紀郎、辻村茂男、川端良子  
水文・水資源学会誌 12（2）：177-189 1999
  - ⑨ アラル海流域の灌漑農業と環境問題 石田紀郎、川端良子、辻村茂男、中原紘之  
沙漠研究 6-2. 7-12 1997

- ⑩ アラル海危機—沙漠化は止められるか 石田紀郎 世界 631:185-192 1997 岩波書店
- ⑪ アラル海・シルダリア流域の農薬問題 1995 日本カザフ研究会報告書-1995:117-126
- ⑫ 環境学を学ぶ人のために 石田紀郎、高橋正立編集 1993 世界思想社
- ⑬ カザフ政府への報告書—イリ川系・バルハシ湖およびアラル海調査 石田紀郎、西村和雄、1991

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：1981年 農学博士（京都大学）

## 業績紹介

### 「環境問題を中心とするカザフスタン研究の先導」に対して

石田紀郎氏は、カザフスタンの環境問題を中心として、日本における中央アジア研究を開拓してきた先駆者である。

同氏は琵琶湖の湖北に育ち、農業を介した人と水との関係に興味を持って京都大学農学部に進学した。同大学院農学研究科を卒業後、京都大学農学部で助手、助教授を経て、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科教授を勤めた。

植物病理学分野を専攻し、病原菌が植物体内に侵入するメカニズムに関する研究により農学博士号を取得した。しかし、1960年代から70年代、農薬を多用して植物病害虫を防除する農業が主流であったため、環境汚染の視点から農業のみならず、農学そのものも根本的に見直すという研究活動を開始した。

1989年、琵琶湖で開催された「環境と文学」に関するフォーラムで世界最大の環境破壊とも言われる「アラル海の消滅危機」を知り、翌90年8月アラル海に赴き、調査研究を開始した。現地では、上述のフォーラムのために来日したソ連作家同盟会長ラスプーチン氏の紹介により、カザフスタンの作家同盟の委員長であり平和委員会の委員長でもあったアリムジャーノフ氏の支援を得た。自由に研究者同士がコンタクトできる現在とは全く異なり、ソ連崩壊前、その一部であるカザフスタンに関する情報は一般的に入手できなかった時代、石田紀郎氏は平和や文学というわずかな外交上の絆を大切にすることでカザフ研究を開拓したのだった。

同氏はまず「日本カザフ研究会」(JRAK)を設立し、同志を募るという方法で、アラル海の研究を推進した。気象学、土壌学、植物学、水質学、土木学、保健学、経済学、畜産学などの諸分野の研究者が集うことによって、質の高い研究成果が蓄積され、『日本カザフ研究会報告書』として13号まで論文集が刊行された。研究者による自発的な実践活動として、国境を超えて環境問題に取り組んで見せたことは注目に値する。

ちょうどソ連崩壊を目の当たりにし、すなわちカザフスタン共和国の誕生期に立ち会うこととなった石田紀郎氏は、現地の要請を受けて国家間の交流に尽力した。在カザフ日本大使館開設に先立ち、アリムジャーノフ氏を大統領特使として日本に迎えたことは、民間の寄付金によって国家間の外交の端緒が開かれたことを意味する。背後には、アラル海の悲劇とともに、カザフスタンのセミパラチンスク州におけるソ連の核実験場の悲劇を是非とも伝えたいという熱い想いがあったという。また、カザフスタンには多くの旧日本兵がシベリアから移送され、鉱山労働などに従事させられた歴史を知るに及んで、

石田紀郎氏は、ケンタウ市に慰霊碑を建立する活動にも貢献している。ソ連崩壊前に、いち早くカザフスタンを調査研究し、現地とのパイプをもっていたがゆえの活動と言えよう。

カザフスタン独立後、現地の研究環境は極端に劣化し、多くの研究者が欧米や中東諸国に転出した。そうした状況に鑑み、石田紀郎氏は、日本カザフ研究会の活動として、外務省や文科省の資金を得て、カザフの若手研究者を継続的に招聘した。さらに、1998年には彼らの企画によりアルマティで国際シンポジウムが開催されるなど、現地における若手研究者の養成に確実に貢献した。と同時に、彼らはまた日本から来訪する新しい研究者たちの窓口にもなるため、結果的に日本人研究者のカザフスタンへの往来に寄与している。

近年では、アラル海最前線に位置するカラテレン村で現地のNGOと共同で植林活動「アラルの森プロジェクト」を推進し、「オアシス」を出現させるなど、地道な活動によって、20世紀の人類史的課題としてアラル海からの警鐘が伝承されることになる。

以上のように、石田紀郎氏は、アラル海をはじめとするカザフスタンの環境問題の調査研究にとどまらず、民間外交、研究者養成、住民支援など幅広く展開しており、その中央アジア地域研究に対する先駆的な貢献は、大同生命地域研究特別賞にふさわしいものと高く評価される。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)